

# 漢字イメージマップの検討

## —「鬼」を素材にして—

佐々木 翔太郎

### 1. はじめに

佐々木(2010)は「鬼ダチ」(とても仲の良い友達)、「鬼かわ」(とてもかわいい)など、若者の間で「鬼」が比喩的に「とても」「非常に」などの意味で運用されていることについて研究している。その内容の一つに、漢字「鬼」の構造や意味内容に着眼した分析がある。この分析は漢字「鬼」が古くから「大きい」「優れている」「熱中」など強意的な意味合いを持っていたことを示すために行われたものであり、「鬼」の強意的用法発生を理論的に追究する過程において有意義な検討項目であったと考えられる。マイナスイメージの非常に強い「鬼」にプラスイメージを生み出す要素が古くから内包されていたことは大変興味深い。

佐々木(2010)は分析の際、漢字辞典などに記述されている説明を参照し、それらを「漢字マップ」と名付けた図で示すことによって、「鬼」字を持つ「塊」「魁」「魂」など18の調査対象語で「鬼」が分担する意味内容を明らかにするという方法を採用している。

次の図1は「塊」の漢字マップである。

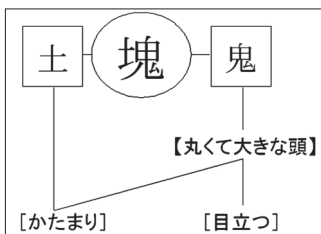


図1 「塊」の漢字マップ  
(佐々木、2010)

佐々木(2010)によると、漢字マップとは「中心概念に置く漢字を構成する部品ごとに分解して、各部品が表す意味を記述していくマップ」である。「塊」は「土」と「鬼」で構成される。「鬼」が「丸く大きな頭」という意味を持つことから、突き出ている「目立つ」ことや、「土」と合わさって「かたまり」を表すことを図で示している。このように、漢字の構造や意味内容を図で示すと、辞典のような活字の羅列の確認で終わるよりも頭の中が非常に整理されるように感じられる。漢字マップは、ワイコフ

(1991=1994)提唱のマインドマッピングの手法を応用した記述法である。佐々木(2010)は、「鬼」の漢字分析の際に漢字マップ作成という作業を経たことが非常に効果的であったと振り返っている。漢字の構造や意味内容を理解するために漢字マップを用いることは、国語教育においても有用性が高いと思われる。

本稿では、佐々木(2010)の「鬼」に関するいわゆる理論的な側面ではなく、漢字マップという手法そのものに注目していく。

なお、ここまで、佐々木(2010)に倣い「漢字マップ」という名称を使用してきたが、「漢字マップ」は日本教育工学振興会(2006)『実践事例アイディア集Vol.14』において宇田智津氏が報

告している国語の授業実践例にて使用されている名称であった。名称の重複を避けるため、以下、本稿で論じる「漢字マップ」は「漢字イメージマップ」と改称する。なお、宇田氏の漢字マップは佐々木 (2010) の「漢字コミュニティマップ」と主旨の類似するものである。

## 2. 研究の目的と意義

本稿では、高等学校の国語科教員である筆者自身の立場を踏まえ、高等学校国語科の授業で漢字イメージマップを活用するための方策を立てる。

佐々木 (2010) は漢字「鬼」が持つ意味内容を詳細に調べるために漢字イメージマップを導入し、意味論の観点からかなり専門的な分析を行っている。しかし、生徒に漢字を教える、あるいは言語に対する興味・関心を喚起するという教育的な目的を考慮すると、生徒向けの漢字イメージマップに求められる水準は、佐々木 (2010) のマップより低くても良いと考えられる。このような点も踏まえ、生徒の実態に合わせた適切な漢字イメージマップの在り方も検討していきたい。

## 3. 漢字イメージマップと漢字コミュニティマップ

佐々木 (2010) では漢字「鬼」を素材に、「鬼」単独として、あるいは「鬼」を部分的に持ち合わせている語が他の部品との組み合わせによって、どのような意味を表出しているかを目的に漢字イメージマップを展開している。

漢字コミュニティマップとは、個々の漢字イメージマップの作成後に完成される巨大なマップである。「鬼」を中心概念に置いて、調査対象語全てを網羅するマップを作成する。各調査対象語を解字説明や意味説明によってグループ分類し、中心語「鬼」から各グループへ枝分かれしていくマップとなる。佐々木 (2010) は「漢字マップというマイクロな視野から、漢字コミュニティマップというマクロな視野へ展開することで、詳細かつ全体像を捉えた分析」になると指摘している。

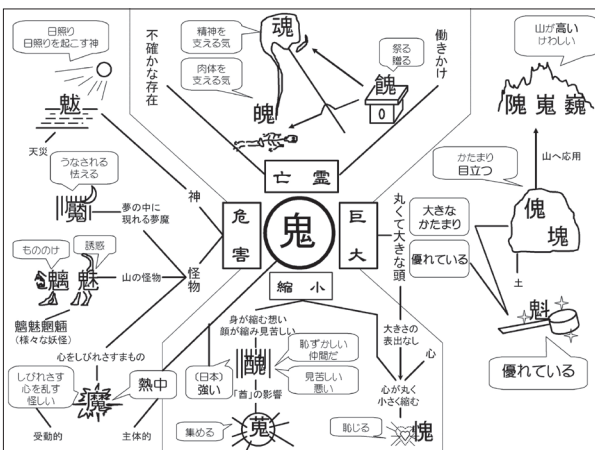


図2 「鬼」の漢字コミュニティマップ (佐々木, 2010)

左の図2は佐々木 (2010) の示した「鬼」の漢字コミュニティマップである。「鬼」は表出している意味によって「巨大」「亡霊」「危害」「縮小」のグループに分類され、それぞれのグループに各調査対象語が所属している。本稿では漢字イメージマップの検討を主目的とするため、漢字コミュニティマップ作成への詳細な過程は佐々木 (2010) を参照されたい。

#### 4. 作成方法の再検討

佐々木 (2010) の漢字イメージマップ作成方法を再検討し、本稿の目的に沿った作成方法を吟味する。

##### 4-1. 調査対象語の選定方法

佐々木 (2010) は調査対象語の選定にあたって、藤堂ら (2007) の『漢字源 (改訂第四版)』(以下『漢字源』) の電子辞書版を使用している。『漢字源』の電子辞書版には「部品読み」という検索機能があり、「部品読み」の欄に「おに」と入力して検索をかけると23語がヒットする。この検索によってヒットした語かつ、白川 (2004) 『字統』に掲載されていた次の18語が調査対象語とされている。なお、ふりがなは音読みである。

き	かい	かい	かい	かい	ぎ	かい	き	しゅう
鬼	傀	塊	魁	嵬	巍	隗	愧	醜
しゅう	こん	はく	き	ち	み	ま	えん	ばつ
蒐	魂	魄	餽	魑	魅	魔	魘	魑

佐々木 (2010) は、『字統』が『漢字源』よりも充実した漢字の読みを提示していることや、『漢字源』には無い観点で解字説明をしていることを尊重し、漢字分析の際の参考資料として採用している。

「おに」という読みは「鬼」にしかないため、『漢字源』電子辞書版の部品読み検索では「鬼」字を含む漢字のみがヒットする。しかし、例えば「うま」の場合であると、「馬」「馴」「駄」など「馬」字を持つ漢字が大部分であったが、「午」「杵」「御」など「午」字を用いた漢字もヒットする。この場合、「馬」字だけを取り出せないため不便のように思われる。しかし、『漢字源』電子辞書版の部品読み機能は「部品読み」欄が全部で三つあり、前述の「うま」も二つ目の欄に「ば」を追加入力して検索かけると「馬」字を持つ漢字のみが検索にかかり、「ば」とは読めない「午」字のものは除外される (ただし、「馬」字を持つ漢字にも読みの関係で除外されるものはある)。なお、『漢字源』では「午」を「馬」に当てたのは秦漢の農暦の影響であり、馬とは何の関係もないと説明されている。

分厚い辞書を引く作業ももちろん大切であるが、同じ字を持つ漢字を簡単に集められるという作業の利便性において部品読み検索は非常に優れていると言える。また、『字統』を併用すればより詳細な分析が行えるが、例えば生徒自身が漢字イメージマップを作成する学習活動を導入する時には電子辞書だけでも十分な分析が行えるだろう。

##### 4-2. 「部首」と「部品」

部品読み機能による検索では「鬼」が部首である漢字の他に「鬼」が部首ではない漢字も検索結果で示されている。例えば「傀」は「鬼」を含んでいるが、部首はにんべん(「イ」)である。佐々木 (2010) は「部首は漢字を構成する基本となる字であるが、『鬼』を部首としていない漢字においても『鬼』が表す意味が何らかの影響を与えている」と述べている。漢字の指導において「へん」「つくり」「かんむり」など、漢字を構成する主要部分となる部首に意識を向け

ることは大切なことである。しかし、部首に重きを置くことなく、漢字を構成する一つ一つの要素を同等の部品と見なす考え方は、ものの方や考え方に自由度を与えるものであろう。漢字イメージマップの導入時には、部首の説明は必須のものとして位置付けても良いと思われる。

#### 4-3. コードの設定と漢字分析表

漢字イメージマップは、一般的な漢字辞典や漢字の構造・意味内容について言及した文献などの記述を基にして漢字分析表を作成することから始まる。漢字辞典には読み、部首、書き順などの他に、字のつくりを説明した解字説明と漢字の意味説明が示されている。解字説明では漢字を構成する部品が、それぞれ表している意味が説明されている。

佐々木 (2010) は解字説明、意味説明を基に漢字分析表を作成しているが、その際、解字説明、意味説明の記述をある程度コード化し、解字コードと意味コードという二つのコードを設定している。以下は、佐々木 (2010) による各コードの概要である。

##### 解字コード (【 】で表記)

調査対象語の解字説明を整理し、漢字を構成する各部品が表出していると思われる意味やイメージを示したコードである。例えば「塊」の場合は、「土」と「鬼」で漢字が作られており、「土」「鬼」それぞれが持つ解字コードがある。解字説明をコード化することで、調査対象語において「鬼」が分担している意味を明確にすることができると考えられる。

##### 意味コード ([ ]で表記)

調査対象語の意味説明を整理し、漢字が表出していると思われる意味やイメージを示したコードである。意味コードには、解字コードと同様のものや、解字コードから連想されるもの(例：【山】から「岩」が派生する)、コードの組み合わせにより作られるもの(例：【山】と【優れている】から「高い」が作られる)があると考えられる。

(佐々木、2010。波線部は引用者が付した)

記述をコード化することによって、長い記述や、似た内容の記述などを簡潔な言葉で統一できる。例えば「人間を害する」「人を襲う」や、その他人間に悪い働きかけを示す記述は、細かな差異はあるが、概ね同じ内容を表すとし、「危害」というコードで簡潔にまとめておけば良いのである。

解字コードは意味コードが作られる際の土台になっていると言える。特に、漢字を構成する部品の解字コードどうしが組み合わせあって、新たな意味コードが作られるとする波線部の考え方は興味深い。意味コードは解字コードの足し算によっても成立する。言い換えれば、漢字の意味は部品の足し算によっても作られるということになる。部品の足し算というシンプルな考え方は生徒にとっても分かり易く、興味・関心を惹きつけるものでもあったと考えられる。

記述のカテゴリズやコード化によって考察を進めていく立場は、グラウンデッドセオリー (grounded theory) と呼ばれる。佐々木 (2010) が漢字の分析をコード化によって進めたのは、「鬼」の漢字コミュニティーマップ作成の過程において、「鬼」が漢字として表出している意味

内容を他の部品と区別して明確にするためであった。前掲の図2、「鬼」の漢字コミュニティマップ内における「巨大」「亡霊」「危害」「縮小」の各グループは「鬼」の主要解字コードによってまとめられたものである（ただし、「縮小」は例外的なものであった）。

漢字コミュニティ作成を目指して漢字分析や漢字イメージマップ作成を行っていくならば、解字コード、意味コードを明確に設定していく必要がある。ただし、学校において、特に生徒の立場からすれば「解字コード」「意味コード」「コード化」などの専門的な言葉で説明されるのは難解なことである。厳密なコード化を強いる必要も無い。「ひとつひとつの部品の意味や、漢字全体の意味を一言で簡単に書いてみよう」という程度の指示で抑えるべきである。

次の表1は漢字分析表の一例である。佐々木（2010）が漢字コミュニティの中心概念として位置付けた「鬼」の例を示す。解字コード、意味コードの表示の方法は前頁の佐々木（2010）の概要に準ずる。

表1 「鬼」の漢字分析（佐々木、2010）

語	読み	解字・意味	解字コード・意味コード
鬼	キ おに	〈解字〉 大きなまるい頭をして足もとの定かでない亡霊を描いたもの。	【大きい】【丸い】【頭】 【亡霊】
		〈意味〉 ①おに。死人のおばけ。おほろげな形をしてこの世にあらわれる亡霊。中国では、魂がからだを離れてさまようと考え、三国・六朝以降には泰山の地下に鬼の世界（冥界（メイカイ））があると信じられた。「幽鬼」 ②〔仏教〕おに。ア：地獄で死者を扱うものや死人たち。イ：人力以上の力を持ち、人間を害するもの。 ③飢餓に苦しむ亡者。 ④いやな人。ずばぬけているが、いやらしい人。「債鬼（借金とり）」 ⑤あの世の。死後の世界の。転じて、人の住まない異様な所。「鬼籍」「鬼録」 ⑥人間わざとは思えない。並はずれてすぐれた。「鬼工」「鬼才」。 ⑦二十八宿の一つ。基準星は、今のかに座に含まれる。たまほめ。〔日本〕 ①おに。その道に一生をかけた人。「芸道の鬼」 ②おに。おにのようにむごい。「鬼婆（おにばば）」「鬼夫婦」 ③おに。おにのように強い。「鬼將軍」 ④おに。並はずれて大きい。ふつうとは違ったおかしな。「鬼ゆり」	【亡霊】 【怪物】 【危害】 【人間】 【いやだ】 【死】 【優れている】 【熱中】 【むごい】 【強い】 【巨大】 【異形】

「鬼」は複数の部品から構成されていない単独の漢字であるため、解字コードは全て「鬼」が単独で持つ解字コードとなる。

『漢字源』では、「鬼」は大きな丸い頭をした亡霊を表す象形文字であるとされている。また、加納（1998）は、「鬼」は「亡霊のイメージを丸くて大きな頭をした人の図形で表した」文字であるとしている。「鬼」は大きなまるい頭と足もとの不確かな亡霊のイメージから作られた漢字であり、「鬼」の解字コードは【大きい】【丸い】【頭】【亡霊】と示されている。

意味説明は多項目に渡るが、それぞれの意味説明をコード化することによってある程度簡潔になっている。日本語の「鬼」特有の意味の欄には「その道に一生をかけた人」という記述が

あるが、この説明は「熱中」というコード名で処理され、より簡潔な言葉にして示されている。コード化の利点はこのようなある種のラベリングにあり、頭の中での整理を促進することができる。

#### 4-4. 漢字分析表から漢字イメージマップへ

漢字分析表作成によってまとめられた解字コード、意味コードを参考にして、漢字イメージマップを描いていく。次の図3は、佐々木(2010)が漢字分析表をもとにまとめた「鬼」の漢字イメージマップである。

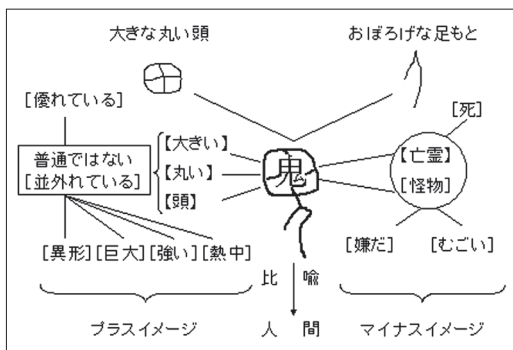


図3 「鬼」の漢字イメージマップ(佐々木、2010)

図3の漢字イメージマップはプラスイメージ、マイナスイメージの区別や「鬼」の象形文字も書き入れてある。コード以外の情報も自由に記入して構わない。自由な記述を認めることでマップ作成はより充実し、作成者自身のオリジナルが表されるものとなるであろう。

【大きい】【丸い】【頭】が[並外れている]イメージへつながり、そこから程度の甚だしさを感じさせるプラスイメージの各意味コードが派生している。

一方で、【亡霊】の解字コードは[怪物]の意味コードと危害を加える存在という点で共通し、諸々のマイナスイメージを作り出している。

漢字イメージマップにまとめることで、解字コードと意味コードの関連性がより明確になる上に、視覚的にも理解しやすいものへと昇華されると言える。

辞書で調べたことを簡潔に分かり易く整理し、図で描写するという作業が単なる「辞書調べ」に加わることにより、非常に充実した漢字学習になると考えられる。教員が生徒に漢字イメージマップを提示して漢字を指導するという目的であれば、佐々木(2010)の実施方法のままが良いと思われる。しかし、生徒が主体となって漢字イメージマップを作成するという活動を実施するのであれば、専門用語の使用やコードに関する厳密な検討は避けたい。コード化は漢字イメージマップ作成の肝とも言えるが、こだわりすぎると生徒のやる気や興味・関心を失わせてしまうおそれがある。

### 5. 漢字イメージマップの例

ここまで、佐々木(2010)の「塊」「鬼」の漢字分析表や漢字イメージマップを示してきたが、他の調査対象語の漢字分析表と漢字イメージマップについてもいくつか取り上げていく。

#### 5-1. 「魁」の漢字イメージマップ

「魁」の漢字分析表を次の表2に、漢字イメージマップを次の図4に示す。

表2 「魁」の漢字分析 (佐々木、2010)

語	読み	解字・意味	解字コード・意味コード
魁	カイ すぐれる さきがけ	<p>〈解字〉「斗（ひしゃく）＋（音符）鬼（頭がまるく大きい）」。</p> <p>〈意味〉</p> <p>①あつものをくむひしゃく。柄が長くて頭がまるく大きい。転じて、頭が大きくて、まるい人形。〔類〕 傀</p> <p>②かしら。首領。一団の仲間を率いていく者。「首魁」</p> <p>③科挙（官吏登用試験）の各科の首席。「魁甲」</p> <p>④大きくて、目だつ。堂々としているさま。「魁然」「形体魁梧」</p> <p>⑤星の名。七つの星を斗（ひしゃく）と見たて、その北斗七星の水をくむ器にあたる部分の四つの星。また、その第一星。「魁斗」「魁星」</p> <p>⑥ひしゃく形のまるいから。かにや貝など、からの形が水をくめるようになったもの。</p> <p>⑦植物の根の塊状のもの。まるく太い芋など。また、事物のもと。根本。〔類〕 塊</p> <p>⇒「魁」とはその頭大にして、柄の長いものをいう。この意味から「魁首」「魁傑」「魁梧」「魁奇」など、すぐれたものの意となる。</p>	<p>鬼：【大きい】【丸い】【頭】 斗：【ひしゃく（斗）】</p> <p>[ひしゃく] [長い] [頭] [丸い] [大きい] [人形] [優れている]</p> <p>[目立つ]</p> <p>[かたまり] [根本]</p>

「魁」は「鬼」と「斗」の部品で構成される。「鬼」の解字コードは【丸い】【大きい】【頭】、「斗」の解字コードは【ひしゃく】となる。

「鬼」の丸く大きな頭は、ひしゃくの水を汲み取る部分を比喩的に表現しているのであろう。「鬼」と「斗」が合わさることで、大量の水を一度に汲み取ることが出来る大きく優れたひしゃくを表していると考えられる。まさに部品の足し算によって作られた意味コードである。また、大きなひしゃくの視覚的なイメージから、[目立つ][かたまり][根本][人形]などのコードも派生している。

図4の漢字イメージマップでは、ひしゃくの絵が挿入されている。[長い]がひしゃくの柄の長さからたらされることや、汲み取る部分の特徴から[かたまり][優れている][目立つ]など様々な意味コードが作られていることが分かり易く示されている。言葉ばかりでマップを編集するのではなく、図4のように絵を取り入れて描くのも非常に効果的であると言える。

また、意味説明①と⑦より、「魁」の類義語に「傀」「塊」があることが分かる。図4では「魁」のどの意味コードと関連があるのかが示されているため、類義語の関係にある語との具体的なつながりが理解しやすい。

佐々木(2010)は「魁」の[優れている]というプラスイメージの意味コードに着眼している。[優れている]は「鬼」そのものにも備わっている意味コードであるが、マイナスイメージの強い「鬼」にこのようなプラスイメージがあることに生徒も驚きを感じることができると予想される。漢文の教材、試験問題で「魁」が出現することもあるが、このような際に漢字分析の時の知識が

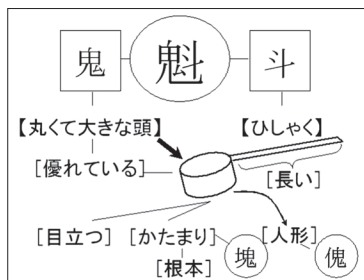


図4 「魁」の漢字イメージマップ  
(佐々木、2010)

生きてくるといったような意外な効果も期待されよう。

## 5-2. 「醜」の漢字イメージマップ

「醜」の漢字分析表を次の表3に、漢字イメージマップを図5に示す。

表3 「醜」の漢字分析 (佐々木、2010)

語	読み	解字・意味	解字コード・意味コード
西鬼	シユウ みにくい わるい はじる たぐい	〈解字〉「鬼(みともない亡霊) + (音符) 西 (= 酋(シユウ)。ぐっとちぢまる)」	鬼：【亡霊】 酋：【縮まる】
		〈意味〉 ①みにくい。引きつったり、ちぢんだりして顔かたちが悪い。〔対〕美「醜女」 ②みにくい。みともない。見苦しい。〔対〕美〔類〕臭「醜態」「醜名」 ③見苦しくて奇怪なもの。〔対〕美 ④はじる。はずかしいと思う。身のちぢむ思いをする。はずかしい。〔類〕羞 ⑤はずかしめる。恥をかかせる。はずかしいと思わせる。見苦しい目にあわせる。 ⑥たぐい。仲間。似た者どうし。〔同〕儔〔類〕衆 ⑦たぐいする。同じ仲間である。また、ようすが似ているさま。〔類〕類「醜類」 〔日本〕 ①しこ。無骨で強いこと。がっしりしていること。 ②しこ。自分を卑下していうことば。「醜の御種(みたて)」	[見苦しい][縮まる][悪い]  [怪しい] [恥ずかしい]  [仲間]  [強い] [卑称]

「醜」の「鬼」は【亡霊】を表し、「西」は【縮まる】を表している。表3では「西」は「酋」と同義であるとされているが、佐々木(2010)は【縮まる】の意味合いがより強い「酋」を採っている。

「醜」では「酋」の解字コード【縮まる】の影響の仕方が興味深い。例えば、[見苦しい]はマイナスイメージのある「鬼」の【亡霊】から連想されていると思われるが、意味説明①では「引きつったり、ちぢんだりして顔かたちが悪い」とあり、顔にしわが寄るといった具体的な記述がされている。そのため、[見苦しい]には「酋」の【縮まる】も影響していると考えられる。「鬼」の【亡霊】がマイナスイメージを与える一方で、「酋」の【縮まる】は顔が引きつる様子といった具体的なイメージを与えている。解字説明と意味説明をじっくりと見ることで、このようにコード同士の興味深い関わりに生徒が気付くこともあるだろう。

また、日本語特有の意味コードとして[強い][卑称]が示されている。漢字は中国より伝来したものであるが、長い時を経て日本語独特の意味も作られている。漢字イメージマップ作成の中で、漢字における通時的な変化に生徒が気付かされることもあるだろう。

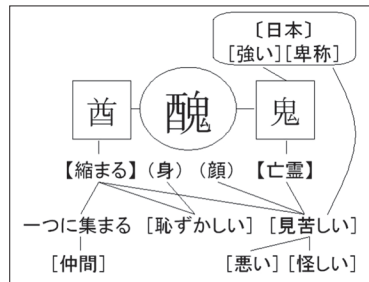


図5 「醜」の漢字イメージマップ (佐々木、2010)



「醜」には「仲間」という意味コードも見られ、「類」と類義語であることが表3では記述されている。「見苦しい」「悪い」などマイナスイメージの意味コードが目立つ「醜」においてこのような意味コードが存在するのはやや意外にも感じられる。「醜」で「仲間」が成立する理由について、佐々木(2010)は『『酉』の【縮まる】が散在しているものを集合させるイメージへと働き、集団をまとめるものの意味として機能したため』であると指摘し、次の図6とともに説明している。

【縮まる】が「仲間」へとつながることを図6のようなイメージとともに説明するのは効果的であると考えられる。前述の「魁」でも触れたが、言葉を言葉で説明するだけでなく、図や絵を用いるなど一工夫があると指導により深みが出る。

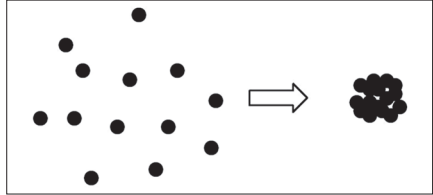


図6 【縮まる】から連想される集合概念  
(佐々木、2010)

### 5-3. 「魔」の漢字イメージマップ

「魔」の漢字分析表を次の表4に、漢字イメージマップを図7に示す。

表4 「魔」の漢字分析 (佐々木、2010)

語	読み	解字・意味	解字コード・意味コード
魔	マ バ おに	<p>〈解字〉「麻」は、摩擦してもみとるあさ。こすってしびれさせる意を含む。</p> <p>「魔」は「鬼+ (音符) 麻 (しびれさす)」。あるいは、梵語 (mara) の音訳字か。</p>	<p>鬼：【怪物】</p> <p>麻：【しびれさす】</p>
		<p>〈意味〉</p> <p>①まもの。人をしびれさせて害を与えるもの。「悪魔」</p> <p>②人が何かに熱中してやめられない原因。「酒魔」</p> <p>③あやしい術。人をしびれさせる幻法。「魔法」</p> <p>〔仏教〕人の心を乱し、仏道の修行の妨げをする悪魔。</p> <p>〔日本〕度をこしてあることに執着する人のこと。「収集魔」</p> <p>「電話魔」</p> <p>⇒仏教で、悟りの妨げとなるものを表す「魔羅」の略。</p>	<p>〔怪物〕〔危害〕〔しびれさす〕</p> <p>〔熱中〕</p> <p>〔怪しい〕</p> <p>〔心を乱す〕</p>

「魔」は「麻」の【しびれさす】が影響し、人をしびれさせて【危害】を加える【怪物】の意味を持つ。物理的に身体がしびれる、あるいは精神的なしびれとして心が乱されるという危害の及び方がある。

「魔」で特に興味深いのは、意味説明②が示す【熱中】の意味コードである。心が乱れる、心がしびれるという点と関連が高いと考えられる。「酒魔」という語が用例で示されているが、『中日大辞典』(1968)では「酒魔」は「酒鬼」と同義であり、いずれも「酒飲み」を表すと記されて

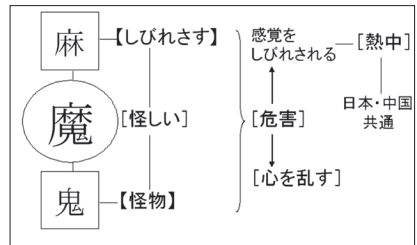


図7 「魔」の漢字イメージマップ  
(佐々木、2010)

いる。いわゆる酒好きの人のことであり、酒に溺れている様子がうかがえる。意味説明③には日本語の意味として「度をこしてあることに執着する人」とあり、この記述も「熱中」の意味コードにつながるものであると言える。用例「収集魔」「電話魔」に関して、佐々木（2010）は「収集の鬼」「電話の鬼」「鬼のように収集する」「鬼のように電話する」と言い換えることが可能であると指摘している。

「鬼」「魔」は「熱中」の意味合いにおいて類似点を持っている。「～の鬼」は『日本国語大辞典（第二版）』（2000-2002）にも記載のある事項であるが、「鬼のように～」という言い回しは一時代の若者語である。近年は「鬼かわ」「鬼うま」（とてもおいしいこと）など、「鬼～」が若者の間で最もよく使用されている言い回しである。これらの強意表現と「魔」の意味内容とを関連付けながら説明出来れば生徒も興味を持って話を聞けるだろう。

以上の点を踏まえると、図7の「魔」の漢字イメージマップは次の図8のような付け足しがあるとより良くなると思われる。

「鬼のように～」 「鬼～」は正しい日本語の使用方法という面からすれば問題のある表現と言える。生徒に対し、このような表現が実態として存在することは認めつつも、積極的に使って良いものと肯定することは無いように心掛けたい。

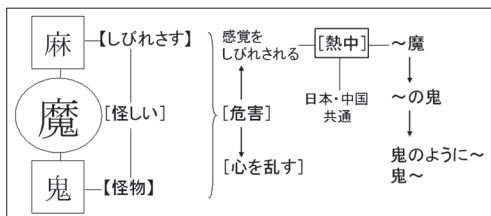


図8 「魔」の漢字イメージマップ（改案）

## 6. マインドマッピングよりも重要な漢字イメージマップの位置関係

マインドマッピングは記憶定着のために用いられることが多い。漢字イメージマップも漢字の意味理解のためには有効な手段であると思われる。しかし、漢字イメージマップの最大の特徴であり、良さであるのは、当該漢字を部品に分解して示す点にある。「魁」の場合は「魁」を挟んで左右に「鬼」と「斗」を配置し、「魔」の場合は「魔」を挟んで上下に「麻」と「鬼」を配置している。佐々木（2010）の調査対象語に「巍」があるが、「巍」の漢字イメージマップでは図9のように「巍」の周囲に「山」「委」「鬼」が三角形のように配置されている。

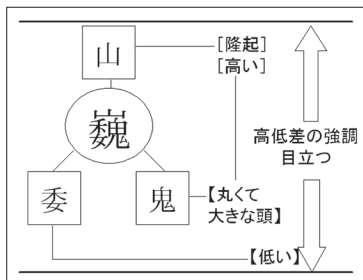


図9 「巍」の漢字イメージマップ（佐々木、2010）

全体像と各部品との位置関係は、漢字を構造的に理解する手助けとなると考えられる。縦線入りの国語のノートや簡条書きの漢字辞典の束縛から離れた見方ができる。漢字イメージマップは記憶定着のためのマインドマッピング以上に中心概念と周囲の記述の位置関係が大きな意味をなすものであると考えられる。

## 7. 考察

学校における漢字イメージマップの活用方法には、教員が生徒に提示する場合と生徒が自ら

マップを描く場合の二通りがあるだろう。

教員が生徒に提示する場合は生徒の実態をよく把握することが非常に重要である。高等学校は進学校、実業校など、学校毎で生徒の基礎学力にかなりの差がある。学力の高い生徒に対してはある程度高いレベルでの指導、一步踏み込んだ指導を試みても良いと思われる。しかし、勉強が不得意な生徒を相手に漢字イメージマップを示す場合は、まず分かり易く、シンプルに示すということを中心に掛けるべきである。生徒の理解や、興味・関心を促進するための提示が、場合によってはかえって逆効果になりかねない。

生徒が自らマップを描く作業は、文部科学省（2009）『高等学校学習指導要領』が示す国語科の「書くこと」の言語活動に相当する活動であると考えられる。文部科学省（2009）は、指導要領改訂にあたって全教科にわたり生徒の言語活動を充実させることを目標に掲げている。国語科は言語活動の中核をなす教科である。このような状況の中で、漢字を素材に図を描くという作業は斬新かつ有意義な言語活動となると考えられる。

生徒が漢字イメージマップを作る場合は、まず漢字辞典の適切な見方、使用方法を教える必要がある。解字説明で字の成り立ちや部品ごとの意味を把握すること、そこから漢字全体としての意味説明が作られることを伝えなければならない。

次に、コード化の作業を生徒にいかにも上手くさせるかが重要となるだろう。辞書を丸写しして終わるのではなく、辞書の記述を基に自分の言葉で簡潔に置きかえることができれば、要点を押さえて記号化する技量の獲得につながる。

専門用語を並べて難しい説明をするのは生徒の学習意欲をそぐことになりかねない。また、完成したマップに完璧を求める必要もない。教員は生徒にいくらかの手順やルールを提示し、あとは思い切って生徒の自由にさせるべきである。漢字イメージマップの目的はあくまでも漢字の基本的な理解や、言語に対する興味・関心の喚起である。

また、漢字イメージマップは高等学校国語科に限らず、日本語教育の分野でも効果が期待されると思われる。学習者は日本語母語話者以上に漢字と意味が結びつきにくいと考えられるため、構造的に漢字を示すことの出来る漢字イメージマップは学習者にとって理解しやすいものとなる可能性がある。

## 8. 今後の課題

今回は佐々木（2010）の「鬼」に関する漢字イメージマップを素材にして、高等学校国語科教育で漢字イメージマップを活用するための検討を行ってきた。今後は実際に授業で漢字イメージマップを導入し、実践例をまとめる必要もあろう。

また、漢字からはテーマが離れるが、次の図10は2010年4月に高校1年生の授業で実際に板書した「おさめる」の同訓異字語マップである。

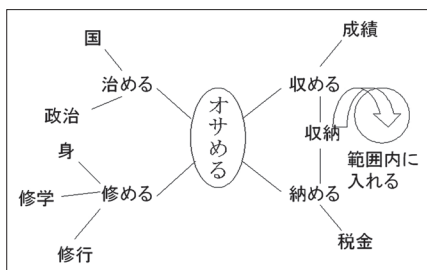


図10 「おさめる」の同訓異字語

このような他の指導にも応用したマップの展開例を検討していきたい。

【参考文献】

- 愛知大学中日大辞典編纂処（1968）『中日大辞典』燎原  
加納喜光（1998）『漢字の成り立ち辞典』東京堂出版  
佐々木翔太郎（2010）「『鬼』における強意的用法の発生について」現代日本語文化研究会発行・  
山口大学人文学部林伸一研究室編『現代日本語文化論』第2号 pp.1-69  
小学館（2000-2002）『日本国語大辞典（第二版）』  
白川静（2004）『新訂 字統』平凡社  
藤堂明保・松本昭・竹田晃・加納善光（2007）『漢字源（改訂第四版）』学研  
Wycoff, Joyce（1991）*MINDMAPPING*. The Berkley Publishing Group. (邦訳はワイコフ著  
（1994）『マインドマッピングー創造性を全開する能力活用法ー』日本教文社）  
日本教育工学振興会（2006）『実践事例アイデア集Vol.14』  
文部科学省（2009）『高等学校学習指導要領』

（ささき・しょうたろう）